

18世紀後半のロシア官界と非ロシア人エリート

* 田 中 良 英

The Integration of the Non-Russian Elite into the Russian State Organization in the Second Half of the 18th Century

TANAKA Yoshihide

Abstract

The Russian nobility had absorbed the individuals and the families voluntarily or involuntarily moving from the remarkably various regions in the Eurasian continent until the collapse of the Russian Empire. This paper attempts to clarify the features and the tendencies of those immigrants into the eighteenth-century Russian Empire who served the army or the state administration particularly after the 1740s. We focus on some topics, that is, from which country these non-Russian elite had derived, for what reason they chose the emigration to Russia, how they lived and worked in the state organization after the settlement, and so on.

Starting with the Petrine reforms, the Russian Imperial government formed the legal conditions for acknowledging tolerance for the immigrants' religious belief in other Christianity than Russian Orthodoxy and giving them material support, which could be a pull factor in facilitating migration.

As compared with the non-Russian elite who moved into the Russian state and worked there in the first half of the eighteenth century, more and more Baltic German noble families began to serve the Russian government after the 1740s, especially in the field of diplomacy. And a lot of French émigrés came to consider Russia their promising destination after the French Revolution. The change in the power relations between the Russian Empire and the Ottoman Empire caused the influx into Russia of the Wallachian and Moldavian nobility and the Greeks deriving from the regions occupied by the Ottoman Empire.

Key words : 18th century, Russia, Non-Russians, Elite, Migration and Contact

1. はじめに

「全般的危機」の時期とも称される17世紀において、政治的変動や生活環境の変化、そして依然ヨーロッパ各地で持続あるいは一層活発化した宗派対立は、人々の移動の大きな要因となった。その際、以前に田中(2016)でも指摘したように、17世紀後半、アレクセイ・ミハイロヴィチの治世(1645～76年)以降顕在化するロシア政府の西欧化政策は、一定の宗教的寛容が保障

されたことも相まって、移住を望む外国人にとり、ロシアを有望な選択肢の一つにしたと考えられる。

こうしたロシアの西欧化政策は17世紀末、ピョートル1世(在位1682～1725年)による1694年の親政開始を契機にさらなる進展を見せる。このピョートル1世治下の全般的改革、通称ピョートル改革による「イノベーション」については近年、むしろロシアの伝統的な国家統治の効率化を損なったとの仮説も出され、議論を喚起しているところだが(Алексеева, 2007;

* 社会科教育講座

Алексеева et al., 2016)、こうした論点の発生自体、逆にピョートル改革がロシアに対して大きな変動をもたらした事実を前提にしているとも言える。

ピョートル1世は、諸分野に導入を図った新たな制度の運営に携わる人材を準備するべく、自国の貴族子弟に留学を強制する一方、1702年4月16日付けのマニフェストにおいて、ロシア国内での宗教的寛容を改めて約束しつつ、移動手段の提供など、外国人のロシア移住を積極的に支援する方針を「至る所で公表し、また印刷した後に、ヨーロッパ中に知らせよう」指示した(ПСЗ, 1830a, PP. 192-195)。

非ロシア人の流入について¹、こうした恩寵や宣伝が従来に勝る具体的な影響を及ぼしたか。厳密な国境管理などの概念もない時代において、統計データも残されておらず、数量的に捕捉することは困難である。それゆえあくまで印象論のレベルに留まるものの、1730年代、女帝アンナ・イオアンノヴナの治世(1730～40年)において、ロシア陸軍の最高位に位置する陸軍元帥(генерал-фельдмаршал)2名がドイツ人ミュンニヒ Münnich, Burkhard Christoph(ロシア名ミニフ Миних, Бурхардт-Христофор, 1683～1767、デンマーク領オルデンブルクの出身)とアイルランド人レシー Lacy, Peter Edmund(ロシア名ラッシー фон Ласси, Петр Петрович, 1678～1751)に占められた点に代表

されるように、ピョートル改革以降、諸部門の要所で非ロシア人が主導的な役割を果たすにいたった構図が極めて示唆的であることも確かであろう。

筆者は田中(2016)において、この1730年代までにロシアの地方行政官に登用された非ロシア人エリート存在を切り口に、17世紀末から18世紀前半のロシアへの人材流入の要因について考察したことがある。そこでは、上述のレシーに象徴されるように、17世紀のグレートブリテン島およびアイルランド島の政治的・宗派的対立の結果、同地を離れた「ジャコバイト Jacobite」²、そして以前からも中央ヨーロッパの諸領邦からロシアに活躍の場を求めて移動してきていた「ドイツ人」の存在感が印象的であった³。

さらに、これら実際に国境を越え、主体的に移住した者達とは異なる立場ながら、北方戦争(1700～21年)の結果、国家領域の変更が生じたがゆえに、自分達の意味とは無関係に⁴、ロシア皇帝を君主とするにいたったバルト沿岸地域の問題も注目される。無論婚姻や相続、戦争に伴う君主各人の支配領域の変更は、以前からもヨーロッパ各地で発生していた。その結果として生じた各国内の法的・民族的・文化的多様性に着目する主張も近年目立つが(代表的なものとして、古谷・近藤(2016))、そうした構造を前提にしつつ、社会的規律化を通じ国内の一体性や国家としての統合力を高

-
- 1 「ロシア人」「非ロシア人」をいかに定義するかは、本来非常に困難な問題である。生物学的な観点からすれば、もともとは東スラヴ人の一派としての「大ロシア人」というカテゴリーが設定できようが、後の「ロシア国民」が純粋にこのエスニシティのみから派生したわけではなく、むしろ支配民族として招かれた「ヴァリヤーク」の存在も含め、人種的な混淆が日常だったと考えられる。またそれ以外にも、過去に当時のロシア国家の領域内に移住した家系が、生物学的な特徴とは別に、現地での長期の居住体験を通じて、ロシア人としてのアイデンティティを獲得するにいたった構図も十分に考え得る。それゆえ、あくまで便宜的であるが、本稿では1700年前後までロシア国家の領域外に居住し、以降にロシアに移住した個人・集団を「非ロシア人」と見なす。この場合、かつてロシア国内に居住し、一旦国外に出た上で再度戻ってきた存在の扱いが難しくなるが、管見の限りながら、本稿が対象とした18世紀においてはこうした家系は見られなかった。
 - 2 ジャコバイトとは、1688年の名誉革命においてイングランド・スコットランド・アイルランドの3王国から追われたジェームズ2世(在位1685～88年)あるいは彼の直系男子の復位を支持する集団を指す。名称は、ジェームズのラテン語読みに起因する。
 - 3 無論18世紀の時点でドイツと称される国家はなく、その意味で「国民」としてのドイツ人は存在しない。それゆえ厳密な区分は困難だが、本稿では、中部ヨーロッパをルーツとし、ドイツ語を母語とする家系に属する者達というニュアンスで、ドイツ人という語を用いる。
 - 4 1710年4月以降、相次いでバルト沿岸の都市リガ、レーヴェリ[現タリン]、ヴィーボルク、ケクスゴリムКексгольм[現プリオゼルスク]がロシア軍の占領下に入り、事実上バルト沿岸地域がロシア国家に併合されていく過程において、1710年9月30日付けでリフランド公国の貴族(ПСЗ, 1830a, PP. 575-577)、1712年3月1日付けでエストリヤンデヤ公国の貴族身分および地方機関(ПСЗ, 1830a, P. 810)、そして同月13日付けでレーヴェリ市に対し(ПСЗ, 1830a, P. 819)、「彼らの特権、旧来から承認された権利、自由、判例と習わし」の認可状がピョートル1世により与えられた。この特権認可状(жалованная грамота)の交付に当たっては、いずれも現地貴族身分や都市代表の側がピョートルに請願を行った結果と記されており、その意味ではロシアへの臣従は主体的決断とも呼び得るかもしれないが、当時の軍事的状況で他の選択肢が可能であったか、加味して考える必要がある。

めようとする志向が、17世紀中葉における主権国家体制の萌芽以降、とりわけ中部ヨーロッパ以東で高まりつつあった点も無視できない (Raef, 1983)。その意味で、バルト沿岸地域の統合の問題は、従来の国家運営とは異なる局面を迎えていたと言えるが、ロシア帝国による併合から間もないこともあってか、1740年までの時点では、同地域の出身者が他地域の行政官として活用される、すなわち帝国全土を支えるべき人材として中央政府から期待される構図は、まだほとんど存在しなかったように見える。

こうした過去の状況との比較を念頭に、本稿では1740年代以降のロシア帝国に対する非ロシア人流入の全般的な傾向性の変化の有無を探ると共に、彼らがロシア官界にもたらした影響について、各種史料から考察することを目指す⁵。ロシア貴族研究はソ連解体に伴い1990年代以降活発化し、とりわけ貴族身分の末裔によるルーツ追求を中心とする系譜学研究は大きな成果を挙げてきた。本稿でも、これらの成果やそれをもとにした近年の便覧 (例えば *Дворянская* (2000)、*Федоленко* (2003)、*Блонский* (2007) など) を通じて、18世紀以降にロシアに移住し帝国への勤務を開始した家系の解明に努めている。その際、移動という現象が持つ作用や意義を検討する目的もあって、出身地でもとから貴族身分を帯びていた家系に留まらず、ロシア移住後に貴族化した者も考察の対象に含めた。

とはいえ、ロシア貴族の個人情報については、人数自体が膨大であり、少なくとも18世紀に関し、それらを包括的に整理した官庁の記録なども現存しない。例えば、*Русское* (2003) として記載人名の目録が作成された1764～95年刊行の官吏名鑑 (*Адрес-календарь*) は、本稿においても貴重な情報源となっているが、当時勤務していた官吏の氏名や官職などが公表されている一方で、それらが必ずしも網羅的なものではない点、同姓の官吏同士であっても同族なのか明記されていない点など、利用に困る部分も多い。本項では先述の系譜学研究の成果や先行研究の情報などと比較しつつ、親子・兄弟関係の可能性、生没年と勤務年との対応関係などから推定を行い、家系の連続性についての判断

を試みたが、誤謬の可能性も大きい。それゆえ、先に傾向性という語を使用したものの、あくまで入手得た資料の範囲内での印象論的な主張に留まらざるを得ない点は付言しておきたい。

ちなみに、こうした史料制約を補完する意味では、女帝エリザヴェータ・ペトロヴナの治世 (1741～61年)、1754～55年に官吏から供述・提出を求めた経歴書が、生年、出身地、勤務の略歴や待遇、男子の有無、所領の有無に関する情報を含む点で非常に有益である (*Российский*, 2007; 2009)。惜しむらくは、ごく少数しか刊行されていないものの、本稿でも各所で依拠している。

さて、上記の限界性を前提としつつ、第3節で18世紀以降にロシア帝国への勤務を始めた家系の全般的傾向、第4節で一部官吏の経歴や具体的な活動内容について論じることしたい。その前に第2節として、非ロシア人にとってのプル要因の有無を確認するべく、18世紀ロシア政府による外国人政策の時期的変化について概観する。

なお本稿では基本的に、日付をロシア暦 (ユリウス暦) に基づいて記述する。18世紀についてグレゴリウス暦に換算する場合には、11日を加える必要がある。国外との往信文に関連する情報についてもロシア暦で記述するよう努めたものの、一部の事項についてはいずれの暦法に基づいているのか、それ自体定かではない事例もあり、時には年のレベルでズレが生じている可能性もある。

2. 18世紀ロシア帝国の外国人政策

先に挙げた1702年4月16日付けのマニフェストは、ピョートル1世における非ロシア人専門家への期待を象徴的に示すものだが、さらに1711年2月19日付けで作成された陸軍の定員表では、士官に関し外国人の定員枠が設けられており、年俸額も総じてロシア人のおよそ2倍が予告されていた (ПСЗ, 1830j, PP. 1-6)。また文官については、具体的な俸給額の決定は1724年12月24日付けの勅令まで遅れることになるものの (ПСЗ,

5 本稿では、武官の属する軍、文官が担う中央・地方双方の行政機関、宮内官が仕える宮廷など、官職を帯びていた者により運営される機構全てを合わせて、「官界」と総称している。18世紀ロシア帝国においては、武官・文官・宮内官相互間の人材の移動や同一人による複数部門の兼職が頻繁に生じると共に、いずれの官吏も国家勤務者としての意識を持つ点で共通するため、むしろそれらを一括して捕捉することが必要と考えた。

1830c, PP. 384-385)、ロシア人研究者ピサリコーヴァの調査によれば、1720年時点で中央機関の一つ、歳入参議会の成員に実際に支給されていた俸給は、ロシア人官吏に対し金銭以外に小麦や燕麦が支給されていた点を考慮しても、同一の官等の場合、外国人官吏の金額の方がはるかに高額だったとされる (Писарькова, 2004, PP. 7-8)。

ピョートル1世期には他にも、1720年7月30日付けの勅令で「いかなる民族であれ、鉱業事業を志願する外国人に対し」ロシア人と同様の権利を約束するなど、ロシア産業の振興のため、外国人の企業心や能力に期待する態度が明示された。ちなみに同勅令には、「朕の国家と諸地域においては、有益な鉱石・鉱物に関する絶えず多くの証拠が現存している」との表現が含まれており (ПСЗ, 1830b, P. 223)、現在のプーチン政権もまた同様のレトリックを用いている点を考え合わせると、非常に興味深いところである (むしろピョートル期のこうしたアプローチが、同種のレトリックの初例の可能性もある)。このようなリソースを自国民のみでは活用しきれず、外国資本や専門家に協力を求める構図が今も変わらない点は、ロシア国家の宿病とも受け止められるだろう。

さらに1723年10月23日付けの勅令では、「ウクライナにある朕の諸都市において、セルビア民族から幾ばくかの軽騎兵連隊を扶養する」ために、セルビア人武官個人に対する給料・食料・飼料の支給、妻子と一緒に移住する者への農地・用地の提供が約束されると共に、「連隊丸ごとを集め我が国の勤務に導く者に対しても、その連隊に対しての連隊長の官等が朕から与えられる」こと、「小銃なしに我が帝国に加わる者があれば、軽騎兵の慣例に従い、給金の内金としても、その者に対しては我が国の小銃が与えられる」ことも予告された (Указ, 1886)。

このピョートル1世の治世後、外国人受容の方針を大々的に公示する法令はしばらく現われなくなる。むしろピョートルの皇后にしてロシア史上初の女帝となったエカチェリーナ1世の治世 (1725～1727年) においては、1727年4月26日付けの勅令により、「男女を問わず、ウクライナやロシアの他都市にいるユダヤ人全員を、ロシアから即刻国外に追放する」こと、「ま

た今後いかなる手段のもとでも、彼らをロシアに入れてはならず、その点を全ての場所において厳格に警告する」こと、さらに彼らによる金貨・銀貨の持ち出しを禁じることが命じられたりもしている (ПСЗ, 1830c, P. 782)。この方針は、1728年8月22日付けでウクライナ市場への卸売の目的での立ち入りのみ許可する形で、後に若干緩和されながらも (ПСЗ, 1830d, P. 80)、アンナ・イオアンノヴナの治世において女帝を補佐した皇帝諮問機関、大臣官房 (Кабинет министров) のもとでも、ウクライナの居酒屋 (корчма) でユダヤ人を雇い入れること、彼らに居酒屋を賃貸することの禁止が改めて確認されるなど、ユダヤ人への差別的対応は依然顕著であった (ПСЗ, 1830e, PP. 828-829)。こうした禁令が度々確認されている点からは、逆にユダヤ人による諸活動がウクライナで行われ続けていた可能性もうかがえるが、少なくとも法的には、非ロシア人の中でもユダヤ人を例外視する態度は、18世紀を通じて変わらない。

むしろ女帝エリザヴェータによる1742年12月2日付けの勅令では、ギリシア正教への改宗を希望する者を除き、改めてロシア帝国の全領域からのユダヤ人の追放と再入国の禁止とが命じられている (ПСЗ, 1830f, PP. 727-728)。1743年12月16日にも、エリザヴェータ治下で最高行政機関の立場に復帰した元老院 (Сенат) からの報告に対し、ユダヤ人のロシア追放の方針が再度確認された (ПСЗ, 1830f, PP. 981-983)。

またムスリムについては、アンナ期の1730年3月6日付けの勅令において、1729年当時、やはり皇帝を補佐する目的で設けられていた諮問機関、最高枢密院 (Верховный тайный совет) の3月10日付け指令により、ギリシア正教に改宗していないタタール人貴族からの村落の没収が指示された事実が紹介されている⁶。このアンナによる勅令では、すでに改宗、あるいは今後改宗するタタール人貴族とその子孫にそれらの没収地を与えるよう、命じられた (ПСЗ, 1830d, P. 254)。

さらに1743年9月28日付けのエリザヴェータによる勅令では、ギリシア正教に改宗したムスリムに対し、ムスリム領主からの解放と改宗者のみで構成される村落への居住の保障、また債務契約により他者への従属を余儀なくされている者については、返済のための資

6 ただし当該の指令については、『ロシア帝国法律集成』 (ПСЗ) にも最高枢密院議事録にも、本文は収録されていない。

金の一部支援が約束されている(ΠСЗ, 1830f, PP. 919-920)。これらユダヤ人やムスリムへの対応を見る限り、少なくとも非キリスト教徒に対しては、ピョートル1世後の諸政府には差別化の方針を強める傾向が見られたと言えよう。

しかしその一方で、キリスト教徒に対しては以前と変わらぬ恩寵が示されている。例えば、1727年12月26日付けのピョートル2世(在位1727～30年)の勅令では、首都サンクト＝ペテルブルクにおいて、ドイツ福音主義教会の信徒達の嘆願に従い、「彼らの教義に基づく礼拝遂行のための教会、さらに学校、牧師館の建設用」の用地を提供することが命じられた(ΠСЗ, 1830c, P. 908)。こうした宗派を問わない寛容に関連しては、1762年6月13日付けのピョートル3世(在位1761～62年)による勅令でも、「モスクワのドイツ人村におけるカトリック、ルター派、改革派(カルヴァン派)の墓地を、それらの教会に近在する従来の用地に建設する」と共に、「それら教義の死者達をこの墓所に埋葬する」ことが許可されている(ΠСЗ, 1830h, P. 1039)。

専門家としての非ロシア人への期待も依然強い。1731年11月2日付けのアンナによる勅令では、ロシア国内の人材不足に対応するため、「外国人の技術士官一定数をプロイセンその他の勤務より受け入れる」ことが必要とされた(ΠСЗ, 1830d, PP. 550-551)。エリザヴェータ期の1747年8月27日には、外国人をロシア臣民として恒久的に受け入れるに当たり、彼らに求める誓約の様式について「科学アカデミー附属[の印刷所]でドイツ語およびロシア語により500部ほどを印刷後、陸軍・海軍・外務参議会、リガ・レーヴェリ・ヴィーボルクの諸県、そしてそれら諸県の地方には指令に添えて送付する」ことが元老院により指示されると共に、「ロシア語を全く知らない者があれば、そのような者達は自身の言語で誓約を遂行する」ことも許されている(ΠСЗ, 1830g, PP. 748-749)。ロシア語能力を必須としていなかった点にも、まずは非ロシア人の招聘が最優先されていた構図が看取されよう。

このように、エカチェリーナ1世期からピョートル3世期まで、外国人への施策は個別に提示される傾向が強かったが、改めて大々的に原則の公示を意図したのがエカチェリーナ2世(在位1762～96年)である。1762年9月22日の即位式から間もない12月4日付けの

マニフェストで彼女は、「神から朕に委ねられた広大な帝国全土の平穏無事に関し、また同帝国の住民の増加に関し、母親としての配慮と尽力を恒久的に担うこと」を自身の基本的態度とし、「朕に対し多くの外国人、また同様にロシアから離れた朕の臣下・臣民達が、朕の帝国への定住の許可を朕が彼らに与えるよう嘆願しているので、ユダヤ人を除く多様な民族の外国人で、朕が常備する皇帝としての慈悲に好意的な者達を、ロシアでの定住のために受け入れると共に、ロシアに定住するべく到来する者達全員に対し、朕の君主としての慈悲と愛顧が示される」こと、「今日まで自分の祖国から離れている者達自身に対して、帰還を許可すると共に、諸法に基づき彼らを処罰すべきであっても、今日までの彼らの罪全てを赦免する」ことを約束している(ΠСЗ, 1830i, PP. 126-127)。このマニフェストはロシア語、フランス語、ドイツ語、英語で数百部が印刷され、ヨーロッパ各国に駐在するロシア使節達に配布されると共に、現地雑誌への広告を通じて周知が試みられたとされる(Плева, 1995, P. 28)。

ちなみに国外逃亡者への全面的な恩赦については、北方戦争を終結させた1721年8月30日のニスタット講和条約の締結を祝した、1722年4月22日付けのピョートル1世の勅令でも、「逃亡した士官・竜騎兵・兵士や他の軍人達、つまり、陛下の軍隊に在籍中に外国で逃亡したか、あるいは何らかの理由で外国に留まった者達も含む罪人達全員」に対し、「いかなる処罰もなく、彼らによるそれらの罪が赦される」ことが予告された例がある(ΠСЗ, 1830b, P. 518)。こうした大規模な恩赦の態度には、祝賀の気分の一方で、ロシアにおける人材不足への慢性的な懸念を見ることもあながち無理ではないように思われる。

上記のマニフェストでは皇帝による恩寵の具体的な内容は明示されていなかったが、翌1763年7月22日付けのマニフェストにおいては、かなり綿密な条項も含まれることとなった。その詳細についてはゲルマン・プレーヴェ(2008, PP. 34-36)ですでに紹介されているので、ここでは本稿に関連する部分に留めるが、当該法令の冒頭で「朕は朕の帝国の土地の広大さを知悉し、何よりも人類という種の居住に最も有利かつ有益な地域を見つけている。それら今日まで無為に残されている土地の数は少なくない。それらの土地の多くは、自身の内部に各種の使い果たせぬ豊富な金属を隠して

いる。森林、河川、湖、そして交易に用いられるべき海が十分に存在するので、多くのマニファクチュア、製作所、その他の工場を増加させる能力も大きい」との認識が示されている点には、ロシアの豊富なりソースを強調する1720年時の勅令との共通性も感じられる。

このマニフェストの第1条では「全外国人に対し、朕の帝国への入国を認めると共に、朕の全ての県において望む場所への定住を許可する」原則が提示され、さらにロシアへの移動旅費の提供、信教の自由、一定期間の国税の免除など、各種の特典も約束された(ПСЗ, 1830i, PP. 313-316)。加えて同日付けで、到来する外国人を管理する外国人後見事務局(Канцелярия опекуства иностранных)の新設が宣告されると共に(ПСЗ, 1830i, PP. 316-318)、7月24日付けの勅令において、この「我らが帝国にとってかくも有益な機関」の局長(президент)には、前年エカチェリーナとの間に息子アレクセイ・ボープリンスキー Бобринский, Алексей Григорьевич (1762 ~ 1813) を設けたばかりの寵臣グリゴリー・オルローフ Орлов, Григорий Григорьевич 伯爵(1734 ~ 83) が任命されている(Н емцы-колонисты, 2004, P. 29)。

これらエカチェリーナ2世による一連の政策は、むしろ「植民」と呼び得る大集団の移転・集住を喚起することになった。農民を中心とする非エリート層への宣伝や勧誘が進められ、1763 ~ 66年にロシアには3万名以上が移送されたとされる(ゲルマン・プレーヴェ, 2008, PP. 36-40)。その意味では、従来個人や家族など比較的小人数で行われていたエリートの移住とはやや性格を異にするものの、こうしたロシア帝国による開放性の顕示と移住者の実際の受容とが、エリートを含む非ロシア人の広範な層にとって、移動先としてのロシアの魅力を持続させることに寄与した点は否定できないだろう。

3. 18世紀ロシア帝国に流入した非ロシア人の出身地別傾向

①ドイツ出身者

このエカチェリーナのマニフェストを契機に、ロシア語でポヴォルジェ Поволжье と呼ばれる沿ヴォルガ地方に入植したドイツ人、いわゆるヴォルガ・ドイツ

人の運命を描いたゲルマン・プレーヴェ(2008)は、ロシアに住むドイツ人を居住地の観点から6つに区分している(PP. 24-25)。a. バルト沿岸地域のドイツ人(同地域がロシアに編入される以前から、独自の民族的・文化的・地域的な特徴を保持)、b. ペテルブルクとモスクワのドイツ人(ドイツ諸邦を始めヨーロッパ全域から流入。流動性の高さが特徴。学問・言語・教育の領域で西欧の最新の成果を吸収)、c. ヴォルガ・ドイツ人(1760年代にヴォルガ河流域に到来した雑多な入植者集団に由来)、d. 新ロシアのドイツ人(ロシア=トルコ戦争の勝利後、18世紀末にコロニーを形成)、e. ザカフカースのドイツ人(バーデン・ヴュルテンベルクのシュヴァーベン人が主体。18世紀末以降に入植)、f. ヴォルニニのドイツ人(ポーランド王国のヴィスラ河沿岸諸県から移住)、である。

これらロシアに移住したドイツ人、逆にドイツに留学・移住したロシア人については、1991年のソ連解体を契機に、ドイツ・ロシア両国による共同研究が活性化し、多数の成果が生まれている(Российские, 1996; Немцы, 1998; 1999a~c; 2000; 2002; 2003a~c; 2004; 2005; 2006; 2013; Русские, 2000; Россия, 2003)。ただし、総じて学術的・文化的な領域における交流に注目する傾向が強く、18世紀の国家勤務者に関する研究は特別な指導的人物に偏っている印象がある。

本稿ではより一般的な家系をも対象に含め、上記のカテゴリーの内、18世紀ロシア官界への人材の大きな供給源となったaとbを中心に検討する。なお Резун(2002)や Иларионова(2009)の研究に見られるように、18世紀以前からロシアに移住し、極東・シベリアで外交官や官吏、ウラル地域で技術者として活躍していたドイツ人については、首都を介して地域に派遣されたエリートと見なせることにより、bの一部と捉えられよう。本項ではまずbを扱う。

以前と変わらず、18世紀前半の中央政府要人および地方行政官に一定数を輩出していた当該カテゴリーについては、18世紀全体において以下の家系が数えられる(なお判明するものについてはカッコ内に出身地域を記した。姓の現綴りが分かる場合には併記したが、必ずしも確定できない家系も多いため、カタカナ表記に際してはロシア名からに統一している)。すなわち、アッシュ Аш 家(シュレージエン)、プレーヴェルン Бреверн 家(シュレージエン)、ブューレル Бюлер 家

(シュヴァーベン)、ヴァーリベルフ Вальберх 家、ゲイデン Гейден 家 (ヴェストファーレン)、ゴーゲリ Гогель 家 (ヴェルテンベルク)、グロート Грот 家 (ホルシュタイン)、デルヴィース Девиз 家 (ハンブルク)、ディービチ Дибич 家 (シュレージエン)、カンクリーン Канкрин 家 (ヘッセン＝ケッセル公国、ヘッセン＝ダルムシュタット公国)、カプゲル Капгер (Kapherr) 家 (メクレンブルク＝シュヴェリーン公国)、カーウフマン Кауфман 家 (オーストリア)、コツェブー Коцебу 家 (ハノーファー)、レブロン Леброн 家⁷ (オーストリア)、リートケ Литке 家、メールレル＝ザコメーリスキー Меллер-Закомельский 家、ミニフ Миних 家 (オルデンブルク)、モレンゲイム Моренгейм 家 (オーストリア)、ナデルヴェリ Надервель 家 (オーストリア)、ネッセリローデ Нессельроде 家 (ベルク公国)、オスチエルマーン Остерман 家 (ヴェストファーレン)、ポゲンポーリ Поггенполь (Poggenpohl) 家、レンネンカームプフ Ренненкампф (Rennenkampff) 家 (オスナブリュック)、サイン＝ヴィトゲンシュテューイン Сайн-Витгенштейн 家、シュヴァネバフ Шванебах 家、シュテューグリッツ Штиглиц 家 (バルデック公国)、となる。彼らの中には、例えばプファルツやフランスでの勤務経験を持つシュヴァネバフ Шванебах、 Генрих Карл Фридрих (Федор Иванович) (1725年生まれ) のように、ロシア勤務以前に諸国での勤務に就いていた者も多く、まさにヨーロッパ全域を股にかけたエリートと言える。

これらの家系の内でロシア移住前に貴族身分を持っていなかったのは、ヴァーリベルフ、カプゲル、メールレル＝ザコメーリスキー、ナデルヴェリ、オスチエルマーン⁸、ポゲンポーリの諸家である。やや煩雑とはなるが、ロシア移住を契機とした社会的上昇の事例を明らかにする目的において、ロシアでの勤務が早かった順に紹介すると、メールレル＝ザコメーリスキー Меллер-Закомельский、Иван Иванович (1725～90) はルター派信仰を持つ「ドイツ」出身の町人で

あったが、1740年にロシア砲兵隊の砲手として勤務を始め、1752年に士官に昇進すると、その後諸戦役での戦功により順調に昇進し、1789年にはロシア帝国の男爵位を与えられた (Федоленко, 2003, PP. 261-262)。陸軍大将として第2次ロシア＝トルコ戦争 (1787～91年) に従軍中、オデッサ近郊のキリヤー Килия 要塞攻防戦で戦死している (Екатерина, 2008, P. 290)。

ポゲンポーリ Поггенполь, Вильгельм Людвиг (Василий Иванович) (1771～1811) とナデルヴェリ Надервель, Фридрих (Федор Яковлевич) (1780年頃生まれ) はいずれも父親が商人としてロシアに移住した点、その後、本人がロシア官界での勤務を通じ、貴族身分を得た点で共通する (Дворянский, 2000, PP. 72-74)。なお後者については、弟レオンチー (1788年頃生まれ) が当初オーストリアに勤務していたとされており、こうした経歴の相違がなぜ生じたのか定かではないものの、1804年にレオンチーがロシア陸軍兵士に転じた後、やはりロシア貴族身分を得るにいたった点には、兄の活躍に影響され、改めてロシアを有望視した可能性も考えられる。 (Дворянский, 1999, PP. 46-48)。

同じ商人身分出身でも、カプゲル Капгер, Иоганн Христиан (Христиан Иванович) (1769～1845) については、専門技術により社会的上昇を果たした事例と見なせよう。彼は1795年にベテルブルクに移住すると、医師として活躍する過程で官位を得たのである (Дворянский, 2010, PP. 35-36)。また特殊技能という点では、ヴァーリベルフ Вальберх, Иван Иванович (1765～1819) も類似の性格を示す。祖父はスウェーデン軍の従卒としてポルタヴァ会戦 (1709年) に従軍中にロシア軍の捕虜になったと言い伝えられるが、その真偽は定かでない。父は帝室劇場の裁縫助手を務め、ヴァーリベルフ当人は帝室劇場の学校で教育を受けた後、宮廷舞踏家として活躍することになった。当人は貴族身分を持たなかったが、息子達が官界で活躍し、貴族身分を得るにいたっている (Дворянский, 2008, PP. 87-98)。

7 1755年5月18日付けの本人の申告によれば、レブロン Леброн, Петр Николаевичは1703年生まれで、1719年にフランスに移った後、1722年に駐仏大使ドルゴルーコフ Долгоруков, Василий Лукич公 (1670～1739) の小姓兼理髪師に採用され、その後、1742年までは各地のロシア外交施設で勤務してきたとされる。こうした遍歴ゆえか、自身の官職・氏名についてもフランス語で「Valet de chambre Pierr Le Brun」と署名するなど、ドイツ人としてのアイデンティティは乏しく見える (Российский, 2009, PP. 245-246)。

8 オスチエルマーンとその家族については、すでに田中 (2009) で詳述しているので、本稿では特に扱わない。

この他、ロシアに子孫を残すことはなかったものの、1740年代以降のロシア官界で活躍したドイツ出身者は数多い。例えばケーニヒスベルク出身のゴーリドバフ Гольдбах, Христиан (1690年生まれ) は1725年にペテルブルクを訪れ、当時科学アカデミー総裁を務めていたプリュメントロースト Блюментрост, Лаврентий (1692～1755) によってアカデミー会員に採用された。直後の1727年には当時まだ皇太子だったピョートル2世の教育係に登用され、さらに1742年に女帝エリザヴェータの皇太子として甥のピョートル・フョードロヴィチ大公(後のピョートル3世)が招かれた際にも、その教育プランを策定・上申する働きを見せたとされる(Екатерина, 2003, P. 16)。1754年時点で現任国務参事官(4等文官、陸軍少将相当)にまで昇進しており、ロシアの官界でも高位に位置していたが、女帝からの照会に対し、未婚であり、所領も所有していないと報告している(Российский, 2007, P. 92)。必ずしもロシア社会に持続的な足跡を残した人物でなかったとはいえ、改めてこうした個人史をたどることにより、18世紀ロシア帝国が多様な人材により支えられていた構図が浮かび上がってくるように思われる。

②バルト・ドイツ人

バルト・ドイツ人については、境界地域に対する歴史学的な関心の高まりを背景に、Thaden (1984)、Whelan (1999)、Гаврилов (2011) を始め、多くの研究成果が現われているものの、19世紀以降の中央政府によるロシア化政策との関係、現地の非ドイツ語話者農民や民族知識人とのせめぎ合いなど、ナショナリズムとの関係性に焦点を当てる問題関心が強いいためか、18世紀の動向に関しては必ずしも十分には検討されていない。本稿の作業を通じて得られた印象によれば、バルト沿岸地域に拠点を有し、そこから18世紀のロシア中央官界に進出した家系は、同地域の併合から時間が経過するにつれて、むしろ世紀の中葉以降に急速に増加の傾向を示すように思われる。ただし実のところ、バルト沿岸の出身エリートを一概にエスニックなドイツ人と見なして良いかなど、留意すべき問題も存在する。

まずは伝統的にバルト沿岸に居住していたと推測される家系として、アロペウス Алопеус 家、パール Бер (Bähr) 家、ゲーンドリコフ Гендриков 家、

ドゥーベリト Дубельт 家、エフィーモフスキー Ефимовский 家、イクスクーリ Иксуль 家、ケーゼルリンク Кейзерлинг (Keyserling) 家、クレインミーヘリ Клейнмихель 家、ラームズドルフ Ламздорф 家、リーヴェン Ливен (Lieven) 家、マードリ Майдель (Maydell) 家、メンゲデン Менгден (Mengden) 家、ニロート Нирод 家、オーステン＝サーケン Остен-Сакен (Osten-Sacken) 家、パートクリ Паткуль (Patkull) 家、スカヴローンスキー Скавронский 家、ラウシェルト Раушерг 家、シュターケリベルク Штакельберг 家の名が挙げられる。

この内、1783年にロシア陸軍の志願兵となったベール Бер, Иван Михайлович (1763/64～1848年) の父はリガ市の商人であり(Дворянский, 2008, PP. 39)、1775年にキエフ・マスケット銃兵連隊伍長としてロシア勤務を開始したクレインミーヘリ Клейнмихель, Андрей Андреевич (1757～1815) の父は同じくりガ市の牧師であった(Федоленко, 2003, PP. 196-197)。

またロシア史上におけるピョートル改革期の特殊性を象徴する存在として、スカヴローンスキー、ゲーンドリコフ、エフィーモフスキーの3家が存在する。スカヴローンスキーは、北方戦争の過程で捕虜になった後、ピョートル1世の2番目の妻にして次代の皇帝に上り詰めたエカチェリーナ1世(ロシア正教改宗以前の名はマルタ)の実家であり、出自に関し諸説はあるものの、バルト沿岸地域の農民とする見方が強い。このエカチェリーナの兄弟カルルとフョードルは、1727年1月にロシア帝国の伯爵位を与えられた(Федоленко, 2003, PP. 385-386)。またエカチェリーナの姉妹フリスチーナ(1687～1729)およびアンナとそれぞれ結婚していた農民ゲーンドリコフ Гендриков, Симон Леонтьевич (1672～1728) およびエフィーモフスキー Ефимовский, Михаил Ефимович (Михаэль Йохим) の子供達も、従妹に当たる女帝エリザヴェータの治世、1742年にやはりロシア帝国の伯爵位を与えられている(Федоленко, 2003, PP. 97-98, 151-152)。

ピョートル1世が自身の皇子・皇女に関しては外国王族との婚姻政策を追求したこともあり、こうした血縁のみに起因する社会的上昇の事例は以後希少となるが⁹、それが制度化・規律化を強力に志向したピョートル改革期に発生した皮肉からは、依然ロシアが王朝的原理に大きく左右されていた構図もうかがえるよう

に思われる。

ところで、これら非貴族の出自を除き、先に紹介した家系にせよ、過去における移住の情報が明らかでないだけで、実際には以下に挙げる家系と同様に、他の地域からバルト沿岸に移ってきた一族である可能性も否定できない。こうした移住者について、もともとの出身地をカッコ内に記すと、アグテ Agte (Agthe) 家 (ザクセン)、バゴブート Багговут (Baggehufwudt) 家 (ノルウェー)、バルクライ = デ = トーリ Барклай-де-Толли (Barclay de Tolly) 家 (スコットランド)、ベンケンドールフ Бенкендорфы (Benckendorff) 家 (「ドイツ」)、ブードベルク Будберг (Budberg) 家 (ヴェストファーレン)、ブークスゲヴデン Буксгевден (Buxhoeveden) 家 (ブレーメン)、ヴェーイマルン Веймарн 家 (「ドイツ」)、ヴィッテ Витте (Witte) 家 (「ドイツ」)。オランダ説も)、ヴラーンゲリ Врангель (Wrangell) 家 (デンマーク)、ゲルネット Гернет (Gernet) 家 (イギリス→ボンメルン)、デーリヴィク Дельви́г 家 (ヴェストファーレン)、イゲリストローム Игельстром (Igelström) 家 (スウェーデン)、クノールリンク Кнорринг (Knorring) 家 (シュヴァーベン)、コールフ Корф (Kolff) 家 (ヴェストファーレン)、メーデム Медем (Medem) 家 (ヘッセン)、メイENDORF Мейендорф (Meyendorff) 家 (「ドイツ」)、オリデローグ Ольдерогге (Olderogge, Olderog) 家 (デンマーク)、パーレン Пален (Pahlen) 家 (ボンメルン)、パウリセー Паульсен 家 (プロイセン)、レビンデル Ребиндер 家 (ヴェストファーレン)、レイテルン Рейтерн 家 (リューベック)、シーヴェルス Сиверс (Sievers) 家 (デンマーク)、ステンボーク Стенбок (Stenbock) 家 (スウェーデン)、チゼンガーウゼン Тизенгаузен (Tiesenhausen) 家 (ホルシュタイン)、トーリ Толь (Toll) 家 (オランダ)、フェルゼン Ферзен (Fersen) 家 (「ドイツ」) となる。なお「ドイツ」と記載されているのは、中部ヨーロッパからバルト沿

岸への移動の過去は明らかなものの、具体的な地域が不明な家系である。

これらの移動の時期は多様であり、18世紀時点でもはや数世紀を経て、恐らくはすでに現地の風習・文化に同化していた者も含まれるだろう。その様態を明らかにすることは、バルト社会に関するさらに詳細な分析が必要な作業であり、本稿の関心の範囲を超える。ただし、その一方で注目しておきたいのは、17世紀後半から18世紀以降のロシアがそうなるように、中近世のバルト沿岸地域がヨーロッパ諸国からの移動者を呼び寄せる地盤となっていた可能性が高い点である。それは、玉木 (2012) が指摘するように、バルト沿岸地域を東端とし、ヨーロッパ大陸を広範につなぐネットワークの存在と機能によるものか (ピョートル改革以降、それがロシアにまで延長されたかと捉えるべきか)、あるいは17世紀に大国として勢威を誇っていたスウェーデン、デンマーク、ポーランドに活躍の機会を見出したエリート達の指向性によるものか。この問題に答えるには、先にも触れたバルト沿岸に居住するエリートそのものの動態と意識に関する個別の研究が必要だろう。

なお玉木 (2012) の見解に関連して付言すれば、彼の議論においては、イベリア半島のユダヤ人商人 (セファルディム) によるアントウェルペン移住が、17世紀オランダの覇権国家化、さらに近代ヨーロッパによる世界支配の重要な契機として注目されている。まさにこうした移動の流れと重なるのが、ピョートル1世期にペテルブルク警視総監 (генерал полицеймейстер) として活躍したデヴィエール Девиер (De Vieirra), Антон Мануилович (1673 ~ 1745) 一族の動きであり、彼の父はポルトガルからオランダに移住したユダヤ人商人であった。デヴィエール自身はオランダ海軍で勤務中にピョートル1世の招きに応じてロシアに移住し、ピョートルおよびエカチェリーナの厚い信頼ゆえに1726年10月にはロシア帝国の伯爵位を与えられるに

9 ただし実際に伯爵位を与えられたイヴァン・ゲーンドリコフ Гендриков, Иван Симонович (1719~78、ただし当人は1717年生まれと自称)、アンドレイ・エフィーモフスキー Ефимовский, Андрей Михайлович (1717~67、当人は1721年生まれと自称)、さらにマルティン・スカヴローンスキー Скавронский, Мартын Карлович 伯爵 (1714~76、当人は1717年生まれと自称) は、いずれもアンナ期の1731~32年に貴族幼年学校 (Кадетский корпус) の生徒 (кадет) に登録されており、むしろ高度の教育を受ける特権的立場を享受していたと言える (Российский, 2007, pp. 101, 85-86, 135)。その一方で、彼ら自らがエリザヴェータ政府に申告した経歴書においては、出身身分や出身地域に関する情報は全く含まれておらず、彼らにとっても当時のロシア官界にとっても、言わば「公然の秘密」と見なされていた可能性もある。

いたる（*Федоленко*, 2003, PP. 128-129）。彼と同様の経路でロシア入りした高官が他に多数存在したわけではなく、また先述のようにユダヤ人の居住制限が強化されていく中で、デヴィエール自身がユダヤ人としてのアイデンティティをその後も維持し得たのか、不明ではあるものの、18世紀ロシア史が近世ヨーロッパ史の大きな流れと無縁ではなかった構図を示唆する、興味深い事例と言えるだろう。

バルト・ドイツ人エリートによる個々の活動については、改めて第4節で触れることにしたい。

③英国人

田中（2016）では、アイルランド貴族レシーやスコットランド貴族キース Keith, James（ロシア名ケイト Кейт, Яков Вилимович, 1696～1758）らジャコバイトが、1720～30年代のロシア陸軍において指導的役割を果たした事実に着目した。このキースとほぼ同年代のアイルランド貴族ブラウン Brown, George（ロシア名ブローン Броун, Юрий (Георг) Юрьевич, 1698～1792）はやはりジャコバイトと目される人物であり、1731年からロシア軍で勤務している。彼は1735～39年のロシア＝トルコ戦争に従軍し、1737年に当時ロシアと共同歩調を取っていたオーストリア軍に派遣されていたが、1738年にオスマン帝国軍の捕虜となった後、1740年に「フランス大使ド＝ヴィリネフ де Вильнев 侯爵により受け出された」とされる（*Переворот*, 1997, P. 122）。

こうした苦難にもかかわらず、彼は1741～43年の対スウェーデン戦争にも、レシー父子やキースらと共に将官として参加しており（*Переворот*, 1997, P. 213）、1743年にレシーの息子フランツ＝モーリッツ Франц Мориц（1725～1801）がオーストリア軍、1747年にキースがプロイセン軍に移ったのとは対照的に、生涯をロシア勤務に費やした。

またスコットランドの名家ラムゼイ Ramsey 家の流れを汲むバリメーン Бальмен (Balmeine), Богдан Адрианович もまたジャコバイトに属すると考えられるが（*Wills*, 2002, P. 187）、フランスでの勤務後、さらにオスマン帝国に移り、イスラームに改宗した上で、帝国軍の西欧化に従事していた。この方針が政府高官らに疎んじられると、1734年前後にロシア勤務に移り、陸軍大佐にまで昇進したものの、1741年に

スウェーデン軍との会戦で戦死する（*Переворот*, 1997, PP. 60-61）。ただし彼の息子アントン Бальмен, Антон Богданович（1741～90）はロシアに定着し、第2次ロシア＝トルコ戦争中の1790年には、最前線のアナパ Анапа 近郊で苦戦していたロシア陸軍の立て直しに成功するなど、軍事指導者としての有能さを見せている（*Екатерина*, 2008, P. 290）。

とはいえ、こうしたジャコバイトの系譜を継ぐ者達の活躍は以前と比較すれば例外的であり、ジャコバイト運動の鎮静化、連合王国自体の安定化と第2次英仏百年戦争の過程での急速な台頭、そして18世紀を通じ必ずしも友好的ではない英露関係などを反映してか、18世紀後半にロシア勤務を求めた英国人は、スコットランド商船の艦長を父に持ち、1764年以降ロシア海軍で活躍したグレイグ Greig, Samuel（ロシア名グレイク Грейг, Самуил Карлович, 1736～88）とその子孫を除けば（*Федоленко*, 2003, PP. 119-120）、ほとんど見受けられない。

④フランス人

こうした英国人の状況とは対照的に、それまで目立たなかったフランス人のロシア流入が増えてくるのは、18世紀の西欧化政策に伴い、当時フランスが最先端を走っていた学芸・文化の分野を含め、ロシアで各種専門家の受容が高まったのと共に、母国の政治的・宗派的状況が、プッシュ要因として移動の重要な契機になる構図を示唆する。

最初の契機はフランス国王ルイ14世によるナントの勅令の廃止（1685年）である。迫害を避け、ラングドックのユグノー貴族スカロン Скалон (Scalon) 家はまずスウェーデンに移住後、1710年からスチュバンとダニール（1748年没）の2人がロシア勤務を開始し、ダニールの子孫がロシアに定着する（*Федоленко*, 2003, PP. 366-367）。またシャンパーニュのユグノー貴族であったレストーク Лесток (L'Estocq) 家も、やはり勅令廃止後ニーダー＝ザクセンに転居し、現地で生まれたヨハン＝ヘルマン Johann Hermann（1692～1767）が1713年にロシア宮廷で医師として勤務を始める。彼はその後、1741年にはエリザヴェータによる宮廷クーデタを支援した功績で、医療事務局（Медицинская канцелярия）の局長に取り立てられることになる（*Блонский*, 2007, PP. 246-247）。

ただしいずれの事例においても、ロシアが直接の移住地となっていない点は、17世紀末から18世紀前半の時期における国際的なロシア評価を示唆する現象とも言えるだろう。こうした傾向については、ポーランドを経由して1745年にロシアを訪れた後、重臣ラズモフスキー Разумовский, Кирилл Григорьевич (1728～1803) の近侍 (камердинер) を経て、1747年から大公妃エカチェリーナの近侍に採用されたバスティドン Бастидон, Яков Бенедикт (Bastidont, Jaques Benoit, 1722年生まれ) の例に象徴されるように (Российский, 2009, PP. 242)、18世紀中葉にも大きく変わるところは見られなかった。

そこに顕著な変化が生じるのは、1780年代、とりわけフランス大革命の発生後である (なお、この時期の露仏関係に関する日本語文献として、岩田 (2001) がある)。文豪プーシキンにとって最後となった1837年1月27日の決闘の介添人を輩出したダンザース Данзас (d'Anzas, Danzas) 家 (Дворянская, 2000, PP. 88-94)、ラムベールト Ламберт 家 (Федоленко, 2003, PP. 232-233)、シャムボラント Шамборант (Chamborant) 家 (Дворянский, 2010, PP. 206-220) が相次いでロシアに亡命し、同国の貴族社会に定着していった。また一時的であったとはいえ、亡命者を率いてオーストリア軍と共同でフランス共和国軍と戦っていたコンデ公爵 Louis V Joseph de Bourbon-Condé (1736～1816) が、1797年10月のカンポ＝フォルミオの和約により同盟者オーストリアを喪失した後、ロシア皇帝パーヴェル 1 世 (在位1796～1801年) の招きに応じ、1800年までロシア勤務を経験するなどの動きも注目される (Эмигрантская, 2006)。

これと並行して、1790年代には反革命貴族によるロシア辺境でのコロニー建設の計画も複数検討されたものの、結局実現することはなかった (Ростиславлев, 2000)。とはいえ、本国の混乱を契機に、フランス人エリートにとってロシアのプレゼンスがそれまでとは劇的に変化したことも確かな事実と言えよう。

⑤ギリシア人

1453年のオスマン帝国軍によるコンスタンティノープル攻略後、旧ビザンツ帝国領の大部分とギリシア正教会はオスマン帝国の支配下に入る。この地にルーツを持つ家系による18世紀ロシア帝国での勤務の

事例は、必ずしも多くはないものの印象的な形で散見される。

一つに、オスマン帝国の支配を嫌い、ヴェネツィヤ共和国本国やその支配地に生活の場を移していた家系であり、ヴェネツィヤで1702年に伯爵位を得ていたカプニースト Капнист 家 (Федоленко, 2003, PP. 181-182)、コルフ島出身のコンドイディー Кондоиди (Condoidi) 家 (Российский, 2007, PP. 105-106)、コンスタンティノープルからクレタ島を経てケファロニア島に移住していたメリッシノ Мелиссино 家 (Федоленко, 2003, P. 261) が挙げられる。ギリシア人研究者ニコロプーロスは、ピョートル改革期の西欧化について、中部および北部ヨーロッパの影響が着目される傾向が強いものの、むしろ同じ正教徒として文化的に近接する南ヨーロッパ出身者、特にギリシア人の果たした役割も無視できないと主張する。彼によれば、中でもケファロニア島を含めヴェネツィヤ共和国の支配下に住んでいた者達は、イタリアの高等教育機関で教育を受け得る境遇にあったため、ロシアでも歓迎される素養を備えていたとされる (Николупулос, 2007, PP. 54-55)。

その一方で、オスマン帝国の支配下にあったギリシア人の移住の事例も存在する。カツアレフ Кацарев, Иван Николаевич (1716年生まれ) は、第4回十字軍により1204年にビザンツ帝国が一時滅亡した後、ギリシア北西部に建てられた亡命政権、エピロス専制公国 (15世紀中葉にオスマン帝国に併合) の領主の末裔であったが、自発的にロシア勤務を求めて1735年にモスクワに移住し、宮内官としての経歴を積み中で、1755年時点では宮廷の近侍を務めていた (Российский, 2009, P. 245)。

またコンスタンティノープルに居住していたフリゾスクレーエフ Хризоскулев, Юрий Иванович (1705年生まれ) は、1733年、隠密業務を担う現地人を必要としていたロシア公使ネプリューエフ Неплюев, Иван Иванович (1693～1773) にリクルートされた後、1738年に外務参議会秘書官としてペテルブルクに移った。1742年に年俸1200ルーブリを約束され、1744年には勅令により農奴426人を下賜されるなど、極めて恵まれた待遇を得たと言える (Российский, 2007, P. 145)。残念ながらネプリューエフの手記には、1733年の記述やフリゾスクレーエフに関する論評が含まれて

おらず、彼が勧誘に応じた理由や心境などは明らかでないものの、彼の場合、客観的な観点からすれば、ロシアへの帰化は急速な社会的昇進をもたらしたと見て良いだろう。

ところで、このように18世紀前半までは比較的小規模だったギリシア人による移住は、エカチェリーナ2世期の2度にわたるロシア＝トルコ戦争の発生に伴い急変する。両国間の関係が緊張化すると、オスマン帝国領のギリシア人がロシアに保護を求める事例が増したのである。それらへの対応は1775年以降、ロシア陸海軍への移入ギリシア人の採用、とりわけバラクラーフスキー Балаклавский 歩兵大隊の創設に始まるギリシア人部隊の設立と黒海北岸のケルチ Керчь・エニカーレ Еникале 近辺への配置、さらに1791年のヤシ講和条約締結後はウクライナ南部での軍事コロニー建設の動きなどとして現われた (Николупулос, 2007, PP. 165-234)。これらの変化が単に辺境部の生活環境の問題に留まったのか、あるいは中央官界への人材供給に資するものとなっていくのか、本稿の範囲を越えてはいるが、移住者によるロシア社会への影響を考える上では、その後の彼らの経歴を精査することも重要な課題となるように思われる。

⑥ ヴァラキヤ・モルドヴァ公国出身者

オスマン帝国に直接支配はされていなかったとはいえ、それぞれ1462年と1538年にその宗主権を認めていたヴァラキヤとモルドヴァの両公国は、西欧世界・正教世界・イスラーム世界の狭間に位置し、これら3世界の力関係の変化に翻弄される立場にあった (黛, 2013)。とりわけ17世紀末以降、それまで強勢を誇ったオスマン帝国の支配性に動揺が見え始めると、この時期の前後にそれぞれヴァラキヤ公、モルドヴァ公を輩出していたカンタクージン Кантакузин (Кантакузино) 家¹⁰とカンチェミール Кантемир 家がロシアに接近し、親族の一部がピョートル1世期にロシア勤務を開始する事態が生じたのは印象的だろう。

その後も18世紀を通じて、これらの地域からロシアへの移住の動きが活発化する。モルドヴァのアバザー Абаза 家、バーントイシュ＝カメーンスキー Бантыш-

Каменский 家、ヴァラキヤのヘラースコフ Херасков 家がそれに当たる。なお、これら両公国とは異なりオスマン帝国の支配下にあったものの、地理的には隣接するセルビアからも、クニャジェーヴィチ Княжевич 家、ミロラドヴィチ Милорадович 家などがロシアに活躍の場を求めた。また、世界の狭間という点では類似した性格を見せるグルジア王国からも、ドナウーロフ Донауров 家、チャヴチャヴァツェ Чавчавадзе 家が移住している。

周辺世界の相互関係が変動し、自家が保持してきた政治的基盤の将来性が見通しにくくなる過程において、現地のエリート達が生存を賭けて選択した移動の形態という点に、これらの共通性が見いだせよう。

⑦ ポーランド人

18世紀以降にロシア勤務を開始した家系で、ポーランド出身者と目されるものとしては、ブルエーヴィチ Бруевич (Bruejwicz) 家、ヴィトヴィーンスキー Витвинский 家、グルシェーフスキー Грушевский 家、グドローヴィチ Гудович 家、ドリーヴォ＝ドブロヴォーリスキー Доливо-Добровольский (Doliwo-Dobrowolski) 家、プリエムスキー Приемский 家、ルジチーフスキー Ржичевский (Рзишевский) 家、サペガ Сапега (Sapieha) 家、チホーツキー Тихоцкий 家、ヤグジーンスキー Ягужинский 家がある。ただし、教会オルガン奏者の息子ながらピョートル1世に信頼され、元老院を統括する検事総長 (генерал-прокурор) を任されたヤグジーンスキー Ягужинский, Павел Иванович (1683～1736)、ピョートル1世期の有力者メンシコフ Меншиков 家との縁談を契機に、1726年にロシアを訪れ、時の女帝エカチェリーナ1世に重用されたサペガ Сапега, Ян-Казимир (1730年没)、そしてロシアの同盟者だったポーランド国王アウグスト2世 (在位1697～1706年、1709～33年) に重用され、ロシアとの接点を持っていたことにより、アウグストの死を契機としてロシア勤務を選んだシユラフタ、ルジチーフスキー Ржичевский, Ян Иероним (1703年生まれ) (Российский, 2009, PP. 251-253) らを除いては¹¹、エカチェリーナ2世期以降にロシアに移住した家系で

10 ピョートル1世に伺候したカンタクージン家のフォーマКантакузин, Фома (Кантакузино, Тома, 1721年没) については、豊富な史料紹介を含む形で近年モノグラフとしてЦвиркун (2015) が刊行されている。

あり、スモレンスクやウクライナの併合を介して17世紀までに多くのシュラフタがロシアの貴族層に入り込んでいた構図と比較すると、18世紀ロシア帝国への移住は相対的に低調な印象を受ける。その結果、同世紀後半のロシア官界に対するポーランド人の影響は必ずしも目立つものとは言えない。むしろポーランド国内の不安定化、そして分割による国家消滅を背景に、18世紀末以降に改めてポーランド貴族の関与が本格化するものと捉えられよう。

なお他にメルデル Мердер 家 (Федоленко, 2003, PP. 267-268)、ソルログープ Соллогуб 家 (Блонский, 2007, PP. 394-395) もポーランドを経由して、18世紀末のロシア官界に移るが、これらはそれぞれもともとザクセン、バルト沿岸の出身である。また18世紀中葉、当時ポーランド王国領であったトルン市でギムナジウムの教師を務めた後、1767年にペテルブルクに転居したヴィルラーモフ Вилламов, Иоганн-Готтлиб (1736～77) はドイツ系とされており (Федоленко, 2003, PP. 78-79)、これらの事例には、18世紀を通じて次第にポーランドからロシアに国際的な求心力が移っていった構図が象徴されているように思われる。

⑧その他

上記以外の地域の出身者について挙げると、スウェーデンから移住した家系として、アードレルベルク Адлерберг 家、ボウル Боур 家、ギールス Гирс 家、カムペンガウゼン Кампенаузен 家、カウリバルス Каульбарс 家、フレデリクス Фредерикс 家があるが¹²、この内フレデリクス家は、北方戦争でロシア軍の捕虜となったスウェーデン軍士官の子孫とされる (Федоленко, 2003, PP. 401-402)。

この軍事的捕虜という現象は、強制的な移動を生む形態の代表例として注目されるところであり、近年も18世紀ロシアにおけるスウェーデン人捕虜

(Шебалдина, 2005; Тоштендаль-Салычева&Юнсон, 2009; 入江, 2011)、世紀中葉のオスマン帝国人捕虜 (Познахирев, 2013)、さらに七年戦争時 (1756～63年) のドイツ人捕虜 (Познахирев, 2016) については研究成果がある。

もともと一定の地位や安定した生活を享受していた者にとって、敵軍の捕虜となることは、少なくとも短期的には見通しの乏しさや不自由を余儀なくされる点で、望ましい境遇とは言いがたいかもしれない。その一方で、1799年にロシア帝国の男爵位と伯爵位を相次いで与えられたクターイソフ Кутайсов 家については事情はやや異なる。同家の始祖イヴァン Кутайсов, Иван Павлович (1759～1834) はオスマン帝国生まれのトルコ人だが、第1次ロシア＝トルコ戦争中の1770年にベンデル Бендер (現モルドヴァ) 近郊でロシア軍の捕虜となった。ペテルブルクに連行された後、エカチェリーナ2世により息子のパーヴェル大公に与えられ、ロシア正教への改宗後、大公の身の回りの世話を担うことになる。大公の命によりベルリンやパリで理髪師・医師としての教育を受けるなど、留学の機会も得た後、帰国したクターイソフは当初、大公の近侍兼理髪師を務めていたが、1796年に大公が皇帝パーヴェル1世として即位すると、爵位の他にも莫大な所領を与えられ、急速な社会的上昇を果たすのである。1801年にパーヴェルが殺害されるに伴い、一時的に逮捕され、当人は釈放後も官界には戻らなかったものの、すでに1796年よりロシア勤務を開始していた息子達はそのまま活躍を続けた (Федоленко, 2003, PP. 226-227)。こうしたクターイソフ家の台頭は、ロシア帝国が18世紀末の時点でも依然王朝国家として、皇帝の恣意的な権力行使を許容する構造を含有していた点を示唆する一方で、そのような強固な権力の発露があればこそ、彼のごとき例外的な境遇の変化が可能になった点も無視できない。

11 他に、やはりポーランドのシュラフタ、ニツィーンスキー Ницынский (1700年生まれ) は、「ロシアの外交使節達が、外出に際し自分達の前を乗馬姿で進むようなポーランド人1～2名を、自分のそばに仕えさせる慣例を持っていた」ため、1730年、当時ワルシャワに駐在していた外交官レーヴェンヴォリデ Левенвольде, Карл-Густав (1735年没) により、ロシア勤務に迎えられたとされる (Российский, 2009, PP. 250-251)。現地の外交施設がロシアへの移動や勤務の窓口として機能し得た点は、先述のギリシア人フリゾスクレーエフの事例と共通しており、駐在外交官の任務や日常的な行動様式との関係性に関しても改めて考察する必要があるだろう。

12 ただし、カムペンガウゼン家は17世紀中葉にオランダから (Федоленко, 2003, P. 177)、カウリバルス家も17世紀にボンメルンからスウェーデンに移っている (Федоленко, 2003, PP. 186-187)。

他にも、出身地をカッコ内に記すと、グラッベ Граббе 家 (フィンランド)、サーンチ Санти 家 (ピエモンテ)、シェヴィウス Шевиус 家 (不明)、シュラチェル Шлагер 家 (スイス) などが18世紀にロシア貴族として定着している。なおスイスからは、1743年に渡来したデフォリニ Дефолини, Вильгельм Францович (1709年生まれ) が1755年時点で宮廷小姓の指南役 (Российский, 2007, PP. 95-96)、またチューリヒで生誕後、ドイツ、イタリア、オランダを移動中に1721年にロシア勤務にリクルートされたシェーレル Шерер, Каспар (Csherer, Caspar) (1689 ~ 1755) が1755年時点でポーランド駐在の外交官として勤務したが (Российский, 2007, PP. 154-156)、前者は理由不明ながら1759年に解職され、後者は直後に亡くなるなど、ロシア社会に家系として定着することはなかったと推測される。とはいえ、18世紀中葉のロシア官界が多様な人材により支えられていた点を示す材料の一つと見なせよう。

4. 官界における非ロシア人の機能

本節では本来、同時代人の日記や回想などを通じ、18世紀後半の非ロシア人による日常的な勤務生活に関する情報を抽出することを想定していた。しかしながら、少なくとも刊行史料のレベルにおいて、非ロシア人に関するこの種の情報は、18世紀前半と比較してむしろ減少した印象を受ける。その要因としては、ピョートル改革期からアンナ期まで、ロシアの軍事・行政機構がまさに西欧化を基調とする制度化を進めるに当たり、例えば1730年代に陸軍元帥ミュンニヒが陸軍の組織化に尽力したように (Петрухинцев, 2001)、諸分野で非ロシア人が主導的な地位にあったのに対して、そのような制度の構築が一段落し、非ロシア人の影響力自体が低下した可能性、また新たに整備された諸制度を担い得るロシア人貴族の養成も進み、軍や諸行政機関で政策決定に関与する要職を彼らが占めるようになる一方で、非ロシア人については、あくまでロシア人エリートと同種の働きが求められるに留まり、諸機構のルーティンな運営に配置されるようになった分、同時代人の視角からは後景に退いてしまった可能性などが考えられる。

そのような全般的な傾向を背景に、依然非ロシア

人が重要な役割を果たしていたのが、外交の世界、とりわけ諸国に駐在する外交使節の世界である。エカチェリーナ 2 世による1762年 6 月28日の宮廷クーデタの直後、同年7月31日付けで駐露プロイセン大使ゴルツ Wilhelm Bernhard von der Goltz 男爵 (1736 ~ 96) が国王フリードリヒ 2 世 (在位1740 ~ 82年) に送った報告書においては、「女帝が誰よりも信頼すると共に、諸業務に最も通じているのが以下の者達です。すなわちベストウージェフ伯爵、宰相 2 名、パーニン伯爵、大公の養育係、将軍ヴォルコンスキー公、そしてケーイゼルリンク伯爵です。この最後の人物は駐ウィーン公使でしたが、ワルシャワの宮廷に任命され、即座に出発しつつあります。10月 1 日に実施されるセイムの開会に参列するためです」との評価が示されている (Екатерина, 2003, PP. 252-253)。さらに前後の報告書でも、ケーイゼルリンク自身の動向に対する注目や駐露オーストリア大使メルシー Florimond Claude von Mercy-Argenteau 伯爵 (1727 ~ 94) による彼への警戒心などが記されており (Екатерина, 2003, PP. 253-255)、彼が諸国のマークする人物だったことがうかがえる。

このケーイゼルリンク Кейзерлинг, Герман Карл (1697 ~ 1765) は、1754年 7 月 2 日付けで彼自身が供述した経歴書によると、バルト沿岸のクールラント公国の出身。1710年10月に同国公爵に嫁いだピョートル 1 世の姪アンナ・イオアンノヴナは、直後に公爵が急死した後、未亡人としてクールラントとロシアを遍歴する生活を送る中、諸国を周遊後に1720年に祖国に戻ったケーイゼルリンクを「自身の好みに従い」侍従見習 (камер-юнкер) に加えたとされる。そのアンナが1730年にロシア皇帝として迎えられると、ケーイゼルリンクは「歓喜の式典」の組織のためにモスクワに送られた。当人としては一時的な滞在のつもりだったようにも聞こえるが、女帝の強い希望によりロシア官界に地位を与えられ、1734年には王位継承問題が発生していたポーランドに全権使節として派遣された¹³。1744年にはフランクフルトでの神聖ローマ皇帝選出の場にも送られたとされるが、これはオーストリア継承戦争 (1740 ~ 48年) の過程においてマリア = テレジア (在位1740 ~ 80年) の夫フランツ 1 世 (在位1745 ~ 65年) が皇帝に選ばれた会議のことを指すものと考えられる。その後、彼は1747年にプロイセン、1749年

にポーランド、1752年にオーストリアに全権使節として派遣され、1762年までウィーンに駐在していた（Российский, 2007, P. 104）。

ゴルツによれば「年齢にしては極度に元気」と評されたものの（Екатерина, 2003, PP. 245-246）、すでに晩年を迎えていたケーゼルリンクが一時帰国後、即座にポーランドに派遣された目的の一つとして、同国とロシアとの間で伝統的に影響力が競われてきたクールラントの公位継承問題が挙げられる。ポーランド国王アウグスト3世（在位1734～63年）は1758年より自身の息子カール（1733～96）をクールラント公位に就けていたが、エカチェリーナ2世は、女帝アンナの寵臣にして、かつて1737～40年にクールラント公爵の座にあったビューレン Bühren, Ernst Johann（ロシア名ピロン Бирон, Эрнст-Иоганн, 1690～1772）の復位を計画し、ケーゼルリンクらに対しビューレンの正当性を主張するための論拠の調査を命じた（Екатерина, 2003, PP. 262-265）。実のところ、ビューレンによる1737年の即位についても、当時ポーランドに駐在していたケーゼルリンクが、クールラント貴族自らによる公爵の選出を、ポーランド議会に強く要望し認めさせた結果であった（Переворот, 1997, P. 358）。

このケーゼルリンクと同年で、やはり1730年のアンナの即位に伴いクールラントからロシア勤務に移った人物として、コールフ Корф, Иоганн-Альбрехт（Korff, Johann Albrecht, 1697～1766）がいる。1730年代にやはりロシアで勤務したマンシュチェイン Манштейн, Христофор-Герман（Manstein, Christopher Hermann, 1711～57）の手記によれば、多額の経費ゆえに国内社会の反発を受けていたロシア科学アカデミーの存続を女帝アンナが決意した際、その総裁職はまずケーゼルリンクに委ねられ、彼がポーランドに派遣された1734年にはコールフが後継者に指名された（Перевороты, 1997, PP. 255-256）。アンナの即位に際し皇帝権力の制限を求めた最高枢密院の試みを打倒する上で、オスチエルマーンとアンナとの連絡役を果たすなど（Перевороты, 1997, P. 31）、コールフがアンナの信頼を勝ち得た人物であった点からすれば、これら

アカデミー総裁職のたらい回しは、あたかもクールラント人脈に基づく情実人事ともとれるものの、その後のコールフの活躍を見る限り、一概にはそうとも言いがたいように思われる。

コールフもまた特命全権使節として、1740年にデンマークに派遣された後、1746年にはスウェーデンに送られ、1748年には再度デンマークに出発し（Российский, 2007, PP. 106-107）、没するまで現地で駐在使節を務めた。ちなみに1741年12月、即位した直後の女帝エリザヴェータが、自身の後継者として甥のホルシュタイン＝ゴットープ公爵カール＝ペーター＝ウルリヒ Karl Peter Ulrich（後のピョートル大公）をロシアに招こうとした際、キールで彼を迎えペテルブルクまで同行したのも、当時駐デンマーク公使を務めていたコールフである（Екатерина, 2003, P. 15）。

またスウェーデン駐在中の1747年、彼が公邸で催していた宴席の豪華さは現地の評判となり、中には、コールフがスウェーデン貴族や士官内にロシア支持者を拡大するために巨費を投じていると噂する者も現われた。この噂について、コールフはスウェーデン宮廷に抗議すると共に、そのような意図の介在を否定したところ、同盟者たるロシア大使に関し「スウェーデン王国は好意的な人物と認識しており、何らの疑惑も抱いていない」との回答を得たりもしている（Империя, 1998, PP. 263-264）。外交のありようを念頭に置けば、双方が真意を明らかにしたとは考えにくく、むしろコールフが工作を図った可能性も高いが、それも敏腕な外交使節として、彼が多面的な努力を果たしていた証左と捉えられよう。

アンナの即位に伴うクールラント貴族のロシア流入に関しては、先述のビューレンによる専横（ピロノフシシナ Бироновщина と称される）もあって、否定的な印象が付きまといがちだが、むしろバルト沿岸の優秀な人材をロシアに引き入れた側面も考慮する必要があるように思われる。ちなみに同じくバルト沿岸、エストリャンヂヤ出身のイヴァン・シモーリン Симолин, Иван Матвеевич（1720～99）は1743年に外務参議会の事務局員見習（канцелярии-юнкер）として

13 この時期、後にポーランド王国最後の国王となるスタニスワフ・ポニャトフスキ Poniatowski, Stanisław August（在位1764～95年）に対し、ケーゼルリンクは家庭教師の1人として接点を持っていたとされ（白木, 2005, P. 88）、こうしたつながりもまた、王位継承問題が生じた1764年、ロシア政府が彼の選出を支援する上での材料となった可能性も考えられる。

ロシア勤務を開始した後、1744年にコールフの下僚としてデンマークに派遣され、1746年にはスウェーデンに異動となったコールフに同行し、1752年にデンマークに戻るまで現地に駐在した(Российский, 2007, P. 134)。こうしたコールフのそばでの経験が修練となったのか、シモーリン自身、全権大使として1774年にスウェーデン、1779年に英国、1784年にフランスに派遣される。この1792年まで続いた彼のフランス駐在時は、ヨーロッパにおけるまさに国際的激動の時期に当たっており、例えば1788年7月にロシア＝スウェーデン戦争が勃発すると、同年12月末、フランス外務卿モンモラン Armand Marc de Montmorin Saint-Hérem 伯爵(1745～92)を介して得たスウェーデン国内の情報(デンマーク国王が自港へのロシア艦船の冬営を許可した件に対するスウェーデン国王の憤激)をロシア本国に伝える役割なども担った(Екатерина, 2008, P. 124)。またフランス大革命勃発後の1790年8月26日には、シモーリンを通じて、パリ在住のロシア人全員の本国帰還が指示されたりもしている(Екатерина, 2008, PP. 193-194)。

これらバルト沿岸から移住した家系による外交官の輩出の要因を考える上で、1740年に同じく外務参議会でロシア勤務を開始したシモーリンの兄カルル Симолин, Карл Густав Александр (1715～77、ただし自身は1720年生まれと自称している)の教育経験が注目される。1755年時点の経歴書の冒頭で、彼は「自分の費用で諸外国で外国語を学んだ。それから旅行して回った」と述べており(Российский, 2007, P. 135)、こうした多言語能力を重視する態度こそ、大国の狭間にある地域の住民の言わば「生きる知恵」であったと推測される。プロイセン出身ながらレーヴェリ市で生活していたところを、1721年にピョートル1世の命により医師として採用され、代々の皇帝の侍医を務めたパウリセーヌ Паульсен, Христофор Михайлович (Paulsen, Christoff, 1696年生まれ)もまた、1755年の時点で、次男カルル(1738年生まれ)にはイタリア人建築家ラストレッリ Rastrelli, Francesco Bartolomeo (1700～71)の下で建築学、三男ゴトリープ(1744年生まれ)には「ドイツ語・ラテン語・フランス語の読み書き」を、私財を投じる形で学ばせていると述べている(Российский, 2007, PP. 129-130)。このようにして、エリートが自身の成功体験を子孫に伝播していく

わけである。

とはいえ、こうした教育重視が次第に非ロシア人のみの特性ではなくなるのは、むしろ当然の流れと言える。またイヴァン・シモーリン自身がそうであったように、有能な外交官のそばで修練を積む経験は、ロシア人に対しても適用され始める。1780年以降、事実上外務参議会を主導していたベズボロートコ Безбородко, Александр Андреевич (1747～99)が、1792年時点で最も信頼する下僚の一人と見なしていたモルコーフ Морков, Аркадий Иванович (1747～1827)については、若年から外交使節団に身を置き、とりわけ長期にわたってフランス駐在使節バリャチーンスキー Барятинский, Иван Сергеевич (1740～1811)やシモーリンの下で秘書官・参事官を務めたことが、彼を不可欠な人材に育てたと論評されている(Екатерина, 2008, P. 255)。だとすれば、外交においても他の分野同様に、次第に非ロシア人外交官をロシア人が置換していく傾向が強まる可能性も十分に予想されるが、この点については本稿の範囲を超えるため、あくまで憶測に留まる。

5. 結びに代えて

本稿の仮説を簡単にまとめると、18世紀ロシア貴族の総体について包括的なデータが入手しにくい状況で、数量的に正確な判定を下すことは困難な点を認めつつ、18世紀前半までの傾向と比較した場合、一定の宗教的寛容や財政的支援の約束など、ロシア側のプル要因もあって、依然ロシアに移住する家系が多く見られ続ける点。その中ではやはり中部ヨーロッパからの移住エリートが多数を占める一方で、バルト・ドイツ人のプレゼンスが急速に増加した点。それぞれの出身国の政治的・宗派的動向といったプッシュ条件に左右される形で、英国やポーランド出身者の影響力が低下する一方で、フランスや「3世界の狭間」の出身者の流入が加速した点。ただし外交の分野を例外として、官界における非ロシア人の指導力は総じて低下したように見える点、などが挙げられる。

なお、本稿の対象がロシアから見ると西方の出身者に偏っている点、特にムスリムがほとんど見られない点は、本稿の史料上の制約によるのか、それともやはりピョートル改革以降の西欧化路線や本稿で触れたム

スリムへの差別化政策に象徴されるように、ロシア帝国が求めるエリート像も変化したゆえなのか、この点はイスラーム研究者との対話など、より精緻な確認作業が必要となるだろう。

無論、本稿で取り上げ損ねた家系も多数存在すると思われるし、移動と交流という観点から考察するのであれば、本来それぞれの家系に属する人員全ての経歴や勤務様態を追究すると共に、彼らのアイデンティティの変化の有無、周囲のロシア人との関係性による影響などの問題にまで踏み込む必要がある点は自覚するものの、史料上の情報が乏しかったこともあり、十分に果たすことはできなかった。さらなる史料の探索も含め、今後の大きな課題となるだろう。ただし、試論の域を出ないとはいえ、膨大な数が存在するロシア貴族の家系を目前にして、本稿の作業は、今後切り込むべきルートの一部を明らかにした点に一定の意義を有するようにも思われる。

ちなみに、今回ロシア貴族のルーツを調査するに当たり、極めて多くの家系が当時のロシア国家の領域外から移住してきた印象も受けたが、この点については濱本(2009)が指摘するように、ロシア古来の名門家系でさえ祖先を異民族支配階層の出自と子孫に言い伝えてきた事例も存在するため、必ずしも実態を反映しているとはいいがたい部分もある。系譜学研究のさらなる発展を期待し、その成果を吸収する必要性を認識しつつ、ひとまず筆を置くことにしたい。

※本稿は、2016年度科学研究費補助金(基盤研究(B):課題番号16H03461)の成果の一部である。

文献

- Алексеева, Е. В. (2007), Диффузия европейских инноваций в России (XVIII-начало XX в.). М.
- Алексеева, Е. В., Редин, Д. А., Рей, М. (2016), «Европеизация», «вестернизация» и механизмы адаптации западных нововведений в России имперского периода // Вопросы истории. №6. С. 3-20.
- Блонский, Л. В. (2007), Царские, дворянские, купеческие роды России. М.
- Дворянская (2000) семья. Из истории дворянских фамилий в России. СПб.
- Дворянский (1999) календарь. Тетрадь 6. СПб.
- Дворянский (2000) календарь. Тетрадь 8. СПб.
- Дворянский (2008) календарь. Тетрадь 14. М.

- Дворянский (2010) календарь. Тетрадь 15. М.
- Екатерина (2003). Путь к трону. М.
- Екатерина (2008) П. Искусство управлять. М.
- Эмигрантская (2006) корпус Конде на русской службе. Письмо Павла принцу Конде (3 августа 1797 г.). Из фондов Национального архива Франции // Россия и Франция. Вып. 7. М. С. 77-86.
- Федоленко, В. И. (2003), Дворянские роды, прославившие отечество: Энциклопедия дворянских родов. М.
- 古谷大輔・近藤和彦編(2016)『礫岩のようなヨーロッパ』(山川出版社)。
- Гаврилов, С. Л. (2011), Остзейские немцы в Санкт-Петербурге. Российская империя между Шлезвигом и Гольштейном. 1710-1918. М.
- A. A. Гелрман, I. R. Блэр-Вэ (2008), 鈴木健夫・半谷史郎訳『ヴォルガ・ドイツ人—知られざるロシアの歴史』(彩流社)。
- 濱本真実(2009)『「聖なるロシア」のイスラーム—17-18世紀タール人の正教改宗—』(東京大学出版会)。
- Иларионова, Т. С. (2009), Немцы на государственной службе России: к истории вопроса на примере освоения Дальнего Востока. М.
- Империя (1998) после Петра. 1725-1765. М.
- 入江幸二(2011)「大北方戦争期のスウェーデン捕虜」(『北欧史研究』第28号) 15-22ページ。
- 岩田行雄(2001)「フランス革命とロシア」(『人文科学年報』第31号) 25-68ページ。
- 黛秋津(2013)『三つの世界の狭間で—西欧・ロシア・オスマンとワラキア・モルドヴァ問題—』(名古屋大学出版会)。
- Немцы (2006) в истории России: Документы высших органов власти и военного командования. 1652-1917. М.
- Немцы (1999a) в общественной и культурной жизни Москвы, XVI-начало XX века. Материалы Международной научной конференции (15-16 февраля 1999 г.). М.
- Немцы (1999b) в России: Петербургские немцы. СПб.
- Немцы (2003a) в России: три века научного сотрудничества. СПб.
- Немцы (2013) в России. Немецкий мир Санкт-Петербурга. СПб.
- Немцы (2003b) в Санкт-Петербурге (XVIII-XX века): биографический аспект. Вып. 1. СПб.
- Немцы (1998) и развитие образования в России. СПб.
- Немцы (2000) и Русский север. М.
- Немцы (1999c) России в контексте отечественной истории: общие проблемы и региональные особенности. Материалы международной научной конференции. Москва, 17-20 сентября 1998 г. М.
- Немцы (2005) Санкт-Петербурга: наука, культура, образование. СПб.
- Немцы (2003c) Сибири: история и культура: Материалы Четвертой международной научно-практической конференции. Омск, 29-31 мая 2002 г. Новосибирск.
- Немцы-колонисты (2004) Новосибирск. в век Екатерины. Сборник документов российского государственного архива древних актов по истории организации немецких колоний в Поволжье. М.

- Николупулос, И. (2007), Греки и Россия (XVIII-XX вв.). СПб. Переворот (1997) и война. М.
- Петрухинцев, Н. Н. (2001), Царствование Анны Иоанновны: формирование внутривластного курса и судьбы армии и флота 1730-1735 г. СПб.
- Писарькова, Л. Ф. (2004), Российская бюрократия в эпоху Петра I // Отечественная история. №2. С. 3-19.
- Плеве, И. Р. (1995), Манифест Екатерины II от 22 июля 1763 г.: обещания и реальность // Российские немцы на Дону, Кавказе и Волге. Материалы Российско-Германской научной конференции. Анапа, 22-26 сентября 1994 г. М. С. 26-33.
- Полное собрание законов Российской империи (ПСЗ и 略記) (1830a), Собрание 1. Т. 4. СПб.
- ПСЗ (1830b), Собрание 1. Т. 6. СПб.
- ПСЗ (1830c), Собрание 1. Т. 7. СПб.
- ПСЗ (1830d), Собрание 1. Т. 8. СПб.
- ПСЗ (1830e), Собрание 1. Т. 10. СПб.
- ПСЗ (1830f), Собрание 1. Т. 11. СПб.
- ПСЗ (1830g), Собрание 1. Т. 12. СПб.
- ПСЗ (1830h), Собрание 1. Т. 15. СПб.
- ПСЗ (1830i), Собрание 1. Т. 16. СПб.
- ПСЗ (1830j), Собрание 1. Т. 43. Ч. 1. СПб.
- Познахирев, В. В. (2013), Военнопленные Османской империи в России в период русско-турецкой войны 1735-1739 гг. // Вопросы истории. №1. С. 18-30.
- Познахирев, В. В. (2016), Управление контингентом прусских военнопленных в России в период Семилетней войны 1756-1763 гг. // Вопросы истории. №6. С. 83-97.
- Raeff, M. (1983), *The Well-Ordered Police State: Social and Institutional Change through Law in the Germanies and Russia, 1600-1800*, Yale.
- Резун, Д. Я. (2002), Немцы на русской государственной службе в Сибири в XVII в. // Немецкий этнос в Сибири: Альманах гуманитарных исследований. Вып. 2. Новосибирск. С. 74-80.
- Российский (2007) архив. Вып. 15. М.
- Российский (2009) архив. Вып. 18. М.
- Российские (1996) немцы. Проблемы истории, языка и современного положения. Материалы международной научной конференции. Анапа, 20-25 сентября 1995 г. М.
- Россия (2003) и Германия. Вып. 3. М.
- Ростиславлев, Д. А. (2000), Французская контрреволюционная эмиграция и проекты колонизации юга России в конце XVIII века // Россия и Франция. Вып. 3. М. С. 62-79.
- Русские (2000) и немцы в XVIII веке: Встреча культур. М.
- Русское (2003) служилое дворянство второй половины XVIII века (1764-1795). СПб.
- Шебалдина Г.В. (2005), Шведские военнопленные в Сибири в первой четверти XVIII века. М.
- 白木太一 (2005) 『近世ポーランド「共和国」の再建—4年議会と5月3日憲法への道—』(彩流社)。
- 田中良英 (2009) 「18世紀ロシア帝国における専制とドイツ人エリート—ロシア外交に対するオステルマンの役割を手がかりに—」(『ロシア史研究』第84号) 64-81ページ。
- 田中良英 (2016) 「18世紀前半のロシア地方における非ロシア人官吏」(『宮城教育大学紀要』第50巻) 69-82ページ。
- Thaden, E. C. (1984), *Russia's Western Borderlands, 1710-1870*, Princeton.
- Тоштендаль-Салычева, Т. А., Юнсон, Л. (eds.) (2009), Полтава: судьбы пленных и взаимодействие культур. М.
- Цвиркун, В. И. (2015), Соратник Петра Великого: История жизни и деятельности Томи Кантакузино в письмах и документах. СПб.
- Указ (1886) Петра I о привлечении сербов на русскую службу // Русская старина. Т. 50. С. 436.
- Whelan, H. W. (1999), *Adapting to Modernity: Family, Caste and Capitalism among the Baltic German Nobility*. Köln; Weimar; Wien.
- Wills, R. (2002), *The Jacobites and Russia 1715-1750*, East Linton.

(平成28年 9 月30日 受理)